

good zine

2026 年 6 月 | ISSUE 4





まだ人間で
いるために ...。

ぜひこちらから、
感想やコメントを
お寄せください。



4 巻頭のことば

仲川文隆

6 見えなくなっていたもの

黒田海花

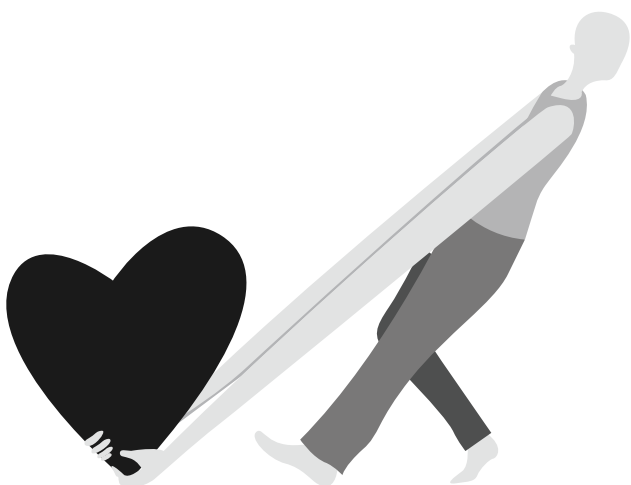
12 本当に大事なものってなんだっけ

白井宥衣

20 効率化のその先へ

岡本幸憲

仲川文隆



便利さの中で、私たちは何を失っているのでしょうか。

≧が文章を書き、画像を作り、コードを書き、欲しい答えをすぐに返してくれる時代になりました。仕事はどんどん速くなり、効率も上がっています。それ自体は、本当

にすごいことだと思っています。

でも最近、私は少し別のことも感じるようになってきました。「便利になった」はずなのに、どこか空虚さを感じる瞬間。本当はもっと相手のことを考えたかたはずなのに、気づけば「処理」することが目的になっている感覚。そんな違和感です。

私はたまに、Gen Zのメンバーにこんな話をしています。

「今やっている仕事、社長に怒られないことが目的になってない？」

もちろん、怖いと思うこと自体は止められるものではないです。怒られたくない。失敗したくない。早く進めなければ。そう思うこともあるでしょう。でも、その恐怖だけで仕事をしていると、少しずつ「本当に見たかったもの」を見失っていきます。

この仕事を通して、どんな未来を作りたいのか。自分は、何をしている時にワクワクしているのか。そこが抜け落ちると、仕事は「処理」になっていきます。

≧も同じなのかもしれません。≧を使っ

て文章を書くこと自体は、悪いことではありません。でも、≧が言ったことをそのまま出しているのか。それとも、≧と一緒に考え、悩み、深め、その思考が少しずつ自分のものになっているのか。そこには、とても大きな違いがある気がしています。

私は様々な人との対話を通して、「人は、自分を見失おうとして見失うわけではない」と感じています。

速さの中で。不安の中で。効率化された仕組みの中で。ただ、少しずつ「感じなくなっていく」。だから大切なのは、便利さを否定することではなく、「気づいて戻ること」なのだと思います。

今回のNicoに集まった文章には、そんな「戻ろうとする感覚」が流れているように感じました。便利さの中で、見えなくなっていたもの。効率化の中で、置き去りになっていたもの。そして、それでも人が人らしくあるために、本当に大事にしたいもの。このissueが、そんなことを改めて考えるきっかけになれば嬉しいです。



電気が止まったら、

何が「できない」になるだろう。



黒田海花

気づかなくなっていくとき

子どもの頃、私の周りには既にたくさんのテクノロジーがあった。食洗機、乾燥機、デジタルカメラ、DVD、ケーブルテレビ、インターネット。けれど、それらは今ほど当たり前ではなく、まだ「使っても使わなくてもいいもの」のように感じていた。

家には食洗機も乾燥機もあった。とはいえ、実際にはほとんど使われていなかった。食器は手で洗うことが多く、洗濯物も外に干す。それが我が家の普通だった。日本の家族文化の影響もあったのだと思う。

当時は、そんなことを深く考えたこともない。ただ、それが当たり前だった。けれど少しずつ、私たちは便利さに身を委ねるようになっていく。

来客があって食器がたくさん出たときには食洗機を使い、乾燥機もいつの間にか日常の一部になった。洗濯物を入れて、一時間ほど待つ。すると、乾いて温かい服が出てくる。その「それだけ」が、日々の手間を少しずつ消していった。

アメリカから日本へ移って暮らすようになってから、私はふと気づくようになった。こうしたテクノロジーが、自分の行動をどれほど静かに変えていたのかを。

アメリカにいた頃、洗濯はいつでもできた。天気も、湿度も、日差しも、時間帯も、乾燥機がほとんど取り除いてくれていた。けれど今、日本で暮らしていると、洗濯物を外に干すことが多くなった。洗濯を

する前には天気予報を見る。雨は降るのか。湿度はどうか。日が暮れるまでに乾くだろうか。朝起きてすぐに、「今日は洗濯日和かもしれない」と思うこともある。洗濯が、もう一度、自然や時間とつながった。

自分でも気づかないうちに、乾燥機はそうした感覚を私の意識から静かに消していたのかもしれない。もちろん、便利さを否定したいわけではない。正直、梅雨の時期になると乾燥機が恋しくなることもある。しかし最近では、もっと大きなことに気づくようになった。便利さは、手間をとて上手に無くしてくれる。その一方で、その下にある仕組みそのものを、少しずつ見えなくしていく。

お湯を沸かすという、ただそれだけのことですら、今になって思えば少し違って見える。数年前まで、私の家では何十年も使い続けてきた鉄のやかんが現役だった。友だちの家にある電気ケトルと比べると、少し古いのかと感じていた。友だちの家では、お湯が沸けば自動で止まり、温度も細かく保ってくれる。

誰かがお湯を沸かし、そのまま別の部屋へ行ってしまふ。すると、しばらくして別の誰かが部屋の向こうから声をかける。

「お湯、沸いてるよー!」

当時の私は、どうして自分の家ももっと便利なケトルにしないのだろうと思っていた。でも今は、少し違う見方をしている。昔のやり方には、注意すること、覚えていること、そして誰かに伝えることが必要だった。効率はよくなかった。けれど、その分プロセスはしっかりと見えていた。

最近、私が気になっているのは、便利さそのものというより、そうした「見えている状態」なのかもしれない。仕組みが便利になりすぎて、私たちが自身がその存在に気づかなくなったとき、何が意識の外へ消えていくのだろうか。

仕組みが見えなくなるとき

「360度カメラのない車を運転するのが怖い」

数か月前、母がそんなことを話していた。最初は少し笑ってしまった。もちろん、そうした機能は便利だし、安全にもつながる。でも、「不便」ではなく「怖い」と感じていることを聞いて、私ははっとした。一度テクノロジーが当たり前になると、それを失うことは、単なる不便ではなくなる。不安になる。危ないと感じるようになる。

便利さはインフラになり、インフラは前提になっていく。

普段、私たちは電気があることを疑わない。インターネットにつながることも、GPSが使えることも、蛇口をひねればきれいな水が出ることも、どこか永遠に続くもののように感じている。

けれど、サプライチェーンが途切れたり、戦争が始まったり、感染症が広がったり、停電が起きたりすると、私たちは突然思い出す。日々の暮らしが、どれほど多くの見えない仕組みに支えられていたのかを。

この感覚は、ルイジアナで育った頃のハリケーンシーズンにもあった。嵐が近づくと、街の空気が少し変わる。ペットボトルの水を買う。

懐中電灯を確認する。電池を探す。持っているデバイスをすべて充電

しておく。いつもの仕組みが止まるかもしれないことを、みんなが前もって知っている感じだった。

実際に停電することもあった。夜になると、家の中では電池式のランプを使った。いつもの家なのに、どこか知らない場所のように感じる。混乱しているわけではない。ただ、普段は何も考えずに頼っている仕組みから、静かに切り離されたような感じがあった。

当時は、それを特別な出来事とは捉えていなかった。でも今振り返ると、あの時間は「普通の暮らし」が実際には何に支えられているのかを、とてもはっきり見せていたのだと思う。

電気が消えると、他のものまで急に見えてくる。

普段は見えない。だからこそ、失われたときにはじめて見えてくる。そんなものが、この世界にはたくさんあるのかもしれない。

普通が変わっていくとき

COVIDの時期、そのことは世界規模で分かりやすくなった。人々はサプライチェーンが止まるかもしれないという不安から、トイレ紙トペーパーを買い占めた。鳥インフルエンザによって卵の供給が乱れた時は、価格が高騰した。シラチャーソースも、長年の唐辛子供給元との問題をきっかけに手に入りにくくなった。近年では、中東情勢の不安定さや石油輸送の混乱が、世界中の燃料価格に影響を与え続けて

いる。

普段は、こうした仕組みをほとんど意識することはない。あまりにも安定しているからだ。けれど現代の暮らしは、国、企業、インフラ、労働、エネルギー、ソフトウェア、原材料、輸送、そして信頼といった、膨大な見えない関係の上に成り立っている。

シラチャーソースは、ただのシラチャーソースではない。卵も、ただの卵ではない。燃料も、ただの燃料ではない。私たちの手元に届くまでに、無数の仕組みが動き続けている。そして、その仕組みがあまりにも滑らかになると、私たちはそれを見ることをやめてしまう。

その一方で、テクノロジーは仕組みそのものだけでなく、「普通」の基準も変えていく。

COVID以前、多くの人はオンライン授業やリモートワークがここまですぐ一般的になるとは想像していなかった。同じ場所に集まることから、当然だと思われていた。それが、ほとんど一夜にして変わった。会議はオンラインになり、学校もオンラインになり、人のつながり方まで変わっていった。

その後、リモートワークによって生活の質が上がったとを感じる人もいれば、やはり人と同じ場所にいる方がいいと感じる人もいた。けれど、好みに関係なく、「できる」とされることの範囲は大きく広がった。テクノロジーは、ただ便利さを生み出しただけではなかった。何を「普通」とするのか。その基準自体を変えていった。

日常の中でも、似たような変化を感じることがある。私が小さかつ



これは
ただの卵
ではない

た頃、ケーブルテレビの番組表には生活のリズムがあった。好きな番組が夜7時に放送されるなら、その時間に合わせて夜の過ごし方を決める。急がなければならない。楽しみに待つ。誰かと同じ時間を共有する。そんな感覚がそこにはあった。

コマーシャルの時間は、ほんの短い隙間だった。トイレに行く。飲み物を取りに行く。急いで用事を済ませる。そして誰かが「始まったよ!」と声をかける。その瞬間にまたテレビの前に戻る。

今では、配信サービスのおかげで、ほとんど何でも好きなときに見られる。一時停止もできる。巻き戻すこともできる。もちろん、その便利さは本当に好きだ。でも時々、無限に自由であることが、私たちの時間との向き合い方を静かに変えているのではないかと思う。

あとで見ればいい。次のエピソードも、またあとで。次の機会も、きつとまた来る。もしかすると、制限があることは、思っていた以上に人の行動に形を与えていたのかもしれない。

道に迷うことについても、同じようなことを感じる。今の私は、Googleマップにかなり頼っている。正直、もうほとんどの場所には、それ無しでは行けない気がする。

以前、母の車のGPSがうまく作動しなくなったことがあった。美術館へ向かう途中で、母も私も道がわからなくなった。そこで私はグロブボックスから紙の地図を取り出し、道路標識を見ながらナビをした。昔は、それが普通だった。人はかつて、出かける前に地図を印刷した。街を空間として覚えていた。ある程度、迷うことを前提にして

いた。今では、ほとんどどこへ行くにも、一歩ずつ案内されている。コミュニケーションにも、同じような変化が起きている。今、私は日本に住んでいて、家族のほとんどはアメリカにいる。それでも、ビデオ通話やメッセージングアプリのおかげで、距離があってもつながり続けることができる。家族にとっても、それは安心につながっている。連絡が取れることは、あまりにも自然になった。だからこそ、連絡が取れないことが不安になる。

一方で、父は子どもの頃の話をよくしてくれる。友だちの家に泊まりに行っても、親に連絡することはほとんどなかったらしい。スマートフォンもない。位置情報の共有もない。すぐに送れるメッセージもない。不確かであることが、普通だった。

今では父は冗談まじりにこう言う。

「スーパーにいるの見たんだけど、これ買ってきてくれる?」

どうして、これが普通になっているんだろう。

システムが消えるとき

現代の仕組みは、何を普通と感じるのか、その境界線そのものを少しずつ変えていく。

仕事の経験でも、そのことを考えることがある。ある日、レストランで働いていたとき、突然インターネットが止まった。注文システムは使えない。キッチンとの連携もできない。でも、お客様は変わらず

食事が必要としていた。

「インターネットが落ちたので、今日は提供できません」

そんなわけにはいかなかった。だから私たちは、すぐに手書きの伝票へ戻った。それを物理的にキッチンまで運ぶ。難しいことではない。でも、とても象徴的だった。その瞬間、普段は意識していなかった仕組みの重さと、それでも手で戻れる場所があることを同時に感じた。

現代の仕組みが止まると、古い仕組みは驚くほど簡単に戻ってくる。もしかすると、古い仕組みは完全には消えていないのかもしれない。新しい仕組みの下で、静かに残っている。そして何かが止まったとき、もう一度、表に出てくる。それは、懐かしさの話ではない。古い方法はただ古いのではなく、仕組みが止まったときに頼れる、別の支え方として残っていた。それもまた、見えなくなっていた支えだった。

以前働いていた活版印刷の職場にも、同じようなことがあった。そこには二種類の機械があった。一つは電動。もう一つは手動だった。もちろん、電動の方が速い。それでも私は、手動の方が好きだった。

その機械は、私にゆっくりすることを求めた。注意を向けることを求めた。そして、プロセスをもう一度目に見えるものにしてくれた。どこか地に足がつくような感覚があった。

私はその時代を生きたわけではない。それでも、その機械を使うことで、かつて誰かがこうやって仕事をしていたのだと、身体で少し理解できた気がした。

今でも、そうした感覚は小さな習慣の中に残っている。私は手でメ

モを書く方が好きだ。その方が気が散りにくいし、書いたことが身体に残る感じがする。地図はオフラインでも見られるように保存しておく。ファイルもクラウドだけでなくローカルに残しておく。腕時計はソーラー式のものを使っている。光さえあれば動き続ける。どれも小さな保険のようなものだ。

高校生の頃、クラスメイトに時間を聞かれたことがある。彼女は、アナログ時計の真下に立っていた。

「時計、そこにあるよ」

そう言うと、彼女は時計を見上げてこう言った。

「読み方がわからない」

そのとき、私は驚いた。見下すような気持ちではない。ただ、仕組みが変わると、知識はこんなにも早く消えていくのかと思った。

たぶん、最近ずっと気になっているのは、そういうことなのだと思う。テクノロジーそのものではない。人間が、どれだけ早くそれに適応してしまうのか。見えない仕組みが、どれだけ早く普通になっていくのか。便利さが、どれだけ早く期待へ変わっていくのか。そして、かつての見方ややり方が、どれほど静かに背景へ退いていくのか。

一度それに気づき始めると、もう気づかないふりをするのは難しくなる。問いは、もはやテクノロジーが私たちに何をしているのか、だけではない。私たちは、何を見えなくしているのか。そして、それが消えたときにしか気づけないものは、何なのだろうか。

AI・DX・資源問題の時代に、
私たちは何を選ぶのか

本当に
大事なものが
なんだっけ？

デジタルまみれの毎日。LINEを開けば秒で誰かとつながれるし、インスタを開けば世界中の「いま」が流れてくる。お店の注文はQRコード、困ったらアーチャット。欲しいものはスマホを2、3回タップすれば数日後には部屋に届く。便利だと思う。早いし、無駄も少ない。

でも、ときどき思う。私たちは、本当に誰かとつながっているのだろうか。本当に、相手のことを見ているのだろうか。そして、自分自身も、誰かにちゃんと見てもらっていると感じられているのだろうか。そんな違和感がずっとあった。

そもそもソフトウェア・DX・AIって？

今や至るところでAIやDXが当たり前のように語られている。

Bossはよく言う。

「ソフトウェアはコードを書くことではない」

「単に業務をデジタル化することがDXではない」

「AIはどんなルールで、どんな情報を、どんな目的で渡すかが全て」

これらの本質はただの効率化ツールではない。人の行動や情報の流れを整え、仕事や社会のあり方を変え、人がもっと本質的なことに向き合えるようにするものだ。つまり、人を豊かにするためのもの。

でも、現場や社会の中では、業務を効率化する、人の作業を減らす、自動化する、コストを下げる、もっと早く、もっと便利にする、、、。

もちろん、それはどれも大事で必要だ。でも、そこで話が止まって

しまうことが多い気がする。何のために効率化するのか。誰のために自動化するのか。何を守るために、その流れを変えるのか。その効率化のフィルターのせいで、その先にいる人を、ちゃんと想像できていないのではないだろうか。

効率化は何のため？

モノが不足していた時代、機械化や大量生産、分業は、一部の人が手にできなかったものを多くの人に届けるために必要だった。効率化は、豊かさを広げるための手段だった。だから、私は効率化そのものを否定したいわけではない。でも、効率化が進むほど、人は役割ごとに分けられていく。

どうしたら早く終わるか。どうしたら時間内に処理できるか。どうしたら自分の工程を止めずに流せるか。みんな真面目に、全力で考えている。でも、自分の役割の外で何が起きているかは、少しずつ見えにくくなる。

問題が起きるたびに、その一点を直す。抜けがあれば、そこをカバーする機能を追加する。また別の抜けが見つければ、またルールや機能を足す。そうして仕組みは少しずつツギハギになっていく。そして気づけば、全体の目的や、そもそもの本質が見えなくなる。本来は、誰かにちゃんと届けるための仕組みだったはずなのに、いつの間にか、目の前の処理を終わらせることが目的になってしまう。

このことを、私は自分自身の失敗としても感じたことがある。現場に入りたての頃、私はいつも緊張していた。絶対にミスできない。だって、この印刷物を楽しみに待っている人がいるから。

なのに、件数をこなして作業に慣れた頃——私は梱包ミスをやらかした。いつの間にか、一番大事な気持ちを忘れてた。「16時30分までに終わらせる」「最悪でも18時完全撤収」目の前のタスクを終わらせることが、目的になってしまっていた。

もちろん、時間を守るのも現場の意地。でも、そこに「相手の顔を思い浮かべる」というほんの少しの丁寧さが抜け落ちてた。楽しみに待っていた人のことを思ったら、情けなくて、本当にショックだった。

印刷の現場で見えるのは、データや紙や工程。お客様との距離がある。だからこそ、目的を見失いやすい。丁寧さを失いやすい。顔が見えない仕事ほど、本当は相手を想像する力が必要なのに、効率化された仕組みの中では、その想像力が一番抜け落ちやすいのかもしれない。

もし、いつものように届かなくなったら

一方で、中東情勢やエネルギー問題、原材料価格の高騰などを通して、私たちは今ある社会や技術が、多くの「当たり前」の前提の上に成り立っていることにも気づき始めている。

紙がある、インキがある、電気が通る、モノが届く。普段は疑いもないけど、世界のどこかで分断が起きれば、その波は一瞬で私たち

の足元に押し寄せる。何かが足りなくなったり、価格が上がったり、供給が不安定になったりして初めて、「この素材はここに関係していたのか」「この仕組みはこんな遠くの場所とつながっていたのか」と気づく。

私たちが当たり前だと思っている便利さや豊かさは、当たり前ではない。もし電力が止まったら？もし通信でなくなったら？その時、私たちはただ「できません」と処理するのか。それとも、相手の状況を想像して、「いま出来ること」を泥臭く、丁寧に伝えられる人間でいられるのか？

必要なものを、必要な時に、必要な分だけ届けること。何かが起きても完全に止まらないようにすること。そして、状況が変わった時に、相手に何が起こっていて、何をどう伝えるべきかを考えられること。丁寧なコミュニケーションは、余裕がある時だけのものではない。むしろ、当たり前が揺らいだ時にこそ、本当に必要になるものなのだと思う。そして、その丁寧さは、きっとその時だけ急に取り戻せるものではない。普段から、相手の状況を想像できているか。その積み重ねが、いざという時に出るのだと思う。

社会を見渡すとどうだろう。飲食店のQRコード注文。店員さんに声をかけたときに「QRで」とだけ一蹴されると、なんか心がキュッとすぼむ。コミュニケーションを拒絶されたみたいで。提供しているのは料理や飲み物だけではないはずだ。その場の空気。人とのやり取り。ちょっとした声かけ。そういうものも含めて、体験なのだと思う。

企業から顧客へのコミュニケーションも同じだ。届けることが簡単になったからこそ、本当に必要としているかを考える前に、送れてしまふ。話題になることが価値になりやすいからこそ、受け取る人にとって本当に分かりやすいか、安心できるか、意味があるかという丁寧さが抜けてしまうこともある。便利なコミュニケーションは増えた。でも、丁寧なコミュニケーションは増えているのだろうか。

生き残るだけの未来なんて、いやだ

ここで一つ紹介したい話がある。Boss から共有されたフィクションだ。そこでは、世界の分断がさらに進み、これまで当たり前だったグローバルなつながりや、国家への信頼や、資源の流れが崩れていく未来が描かれていた。大きな仕組みが、それぞれの誇りや感情や利害によって内側から崩れ、世界は小さな地域ブロックへ分かれていく。

その中で日本は、過去の栄光にすぎるのではなく、自分たちの弱さを受け入れ、生き残るために必要な技術や仕組みを研ぎ澄ませていく。食料も、エネルギーも、労働力も、徹底的に管理される。知恵や技術は、海外との冷徹な取引の材料になる。

読んでいて、怖かった。生命は脅かされないかもしれない。最低限の暮らしは守られるかもしれない。でも、そこには愛とか、安心とか、ワクワクとか、人の体温のようなものがほとんど感じられなかった。

もちろんこれは、最悪のケースを想定したフィクションだ。でも、

人類が利己的で愛のない選択をし続けたら、その未来にならない可能性はゼロではない。

「私は、絶対にこんな世界で生きたくない」

その一つに思想を通せるか

このテーマを書くにあたって、テクノロジー、中東情勢、そしてBossからのフィクションを通して、私はずっと考えていた。Bossに「このテーマは難しいよ、挑戦者だね」と言われた時、素直に違うものにすればよかったとも少し後悔している。

でも、2026年5月22日。「あーこれだ」と思う出来事があった。

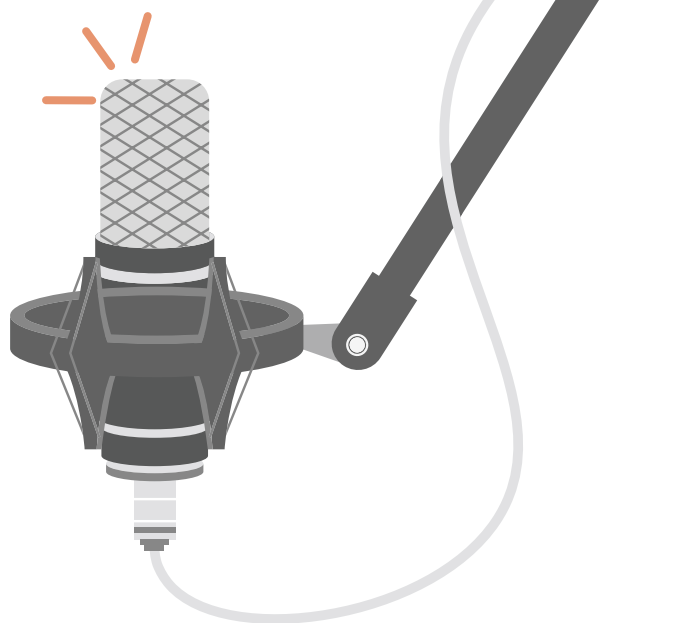
この感覚が、私自身も含めて抜けていた。そして、この感覚を持っているBossたちに、私はワクワクするのだと改めて実感した。

私たちは、最近始めたポッドキャストのマイクについて相談した。今は二種類のマイクを使って撮影しているけれど、声のボリュームがバラバラで、整えるのに時間がかかってしまう。だから、音質を確保しつつボリュームを揃えるために、もう一つピンマイクが欲しい、という話をした。

すると、Bossに言われた。

「これがダメだったから追加でこれを買ってください、みたいなチャラチャラしたことをするな」

「調べて、やって、やって、やって、やっぱりこうしたいと意思を持



つべき。振り回される人は面白くないよ。つまんないよ」

ショックだった。私たち自身が、ポッドキャストを「タスク」として見てしまっていたことに。音量が合わない。編集が大変。だから機材を足す。問題ないと思っていた。

でもBossは、もっと広い話をしていた。ポッドキャストをどう撮るか。マイクをどこに置くか。それを見た人がどう感じるか。色々試した先に、ピンマイクじゃなくて、カッコいいマイクがあった方がいいのではないか。オフィスに来た人が「このマイク何？」と興味を持つかもしれない。誰かが面白いことを言った瞬間に、「今の録らせて」と言える環境になるかもしれない。それが、Printologyに参加するき

かけになるかもしれない。

それは、マイクの話ではなかった。グーフのブランディングの話だった。体験の話だった。仲間を増やす話だった。プロは、こんな小さなことからでも、相手の体験を考えている。どんな機会も逃さず、チャンスとして見ている。考えて、考えて、考えて、プライドを持ってやり切ろうとしている。絶対にこの未来をつかむ。そのためにできることは全部やる。そういう覚悟と勇気とプライドを感じた。

私たちはPrintologyで、「印刷の責任は体験だ」と言っている。でも、その私たち自身が、本当に日々の小さな判断の中で、体験を前提に考えられていたのだろうか。悔しい。すごく悔しかった。

目標を決めたら、そこを見失わない。そのためには、どうすればいいのか。自分はどんな姿でいなければいけないのか。常にアンテナを立てて、マイクのような小さなことでも、そこにプライドを持ってやり通す。その力が必要なのだと思った。そして、そのプライドが、自分の見栄や利己的な欲ではなく、相手のため、社会のため、利他の方に向いたとき、それは愛になるのだと思う。

相手の体験を考え抜くこと。必要なものを、必要な人に、ちゃんと届けようとする。自分の役割だけで終わらせず、全体の目的を見ることが。自分ができることにプライドを持ち、できないことは誰かとつながること。それは、すごく現実的で、強い愛だと思う。

そしてそのとき、Bossがよく話している「プリンティングエコシステム」な世界に、なぜ自分がワクワクするのか、わかった気がした。

それは、ただ会社や工場やシステムがつながる話ではない。

こういう価値や体験を届けたいという同じ志やパッションを持った人たちが、本気で握手をし、やり切る話。

これは私ができる。ここは私が責任を持って届ける。ここは私より、あの人がいい。このエリアなら、あの人だ。この品質なら、このプロだ。この表現なら、このチームだ。

一人ではできないことも、つながることで実現できる。そんな世界なら、今までにない最高の体験が生まれるはずだ。そして、そこに関わる人たちも、ただ消耗するのではなく、自分の仕事に誇りを持ち、価値や意味を感じながら、豊かさを循環させていける。

それは、ただの効率化ではない。ただの分業でもない。ただのデジタル化でもない。できる人が、できることに誇りを持つ。できないことは、信頼できる誰かに託す。そして、みんなで一人の体験のために本気になる。フェアで、安心で、ワクワクがちゃんと巡る社会。誰か一人だけが勝つんじゃないくて、みんな豊かになる世界。そんなNew Normalを作りたい。

次のNormalを、私たちの手で

Z世代。私たちももう、時代を受け取るだけの側ではなく、時代を創る側にいる。過去に文句を言うだけでは終わりたくない。ただ古いものとして切り捨てたくもない。

でも、DXも、ソフトウェアも、印刷も、デジタルも、アナログも、対立させるのではなく、過去の成功も、失敗も、便利さも、歪みも受け止めながら、どうすれば人・社会をもっと豊かにできるのかを問い続けたい。

私たちZ世代は、デジタルの恩恵も、それゆえのデジタルデトックスしたくなる疲れも、両方リアルに知っている。そして、アナログに對して、単なる懐かしさではなく、贅沢や新しい価値を感じている。

さらに今の時代には、デジタルになる前の世界を知り、便利さが生まれていく瞬間も、その歪みも体験してきた人たちがいる。私たちは、その経験から学ぶことができる。そして同時に、私たち自身の新しい感覚で、これからの使い方を選び直すこともできる。

過去を否定するのではなく、受け継ぐ。でも、そのまま繰り返すのではなく、自分たちの時代に合う形でつなぎ直す。便利さの先で、何を大事にするのか。技術を、誰のために、何のために使うのか。どんな世界なら、心から好きだと思えるのか。それを問い続け、信念と責任を持って選び続ける。小さくまとまらない。どんどん言って、どんどんやってみる。失敗してもいい。悔しがればいい。そこからまた考えて、試して、次に進めばいい。

本当に大事なものってなんだっけ。その問いに、正解を一発で出すことはできないかもしれない。でも、問い続けることはできる。選べる続けることはできる。視野を広げ、動き続けることはできる。私はそこから始める。



私たちは豊か
になった？



世界は速くなった。



岡本幸憲

効率化のその先へ…

私たちが「便利さ」と引き換えに、
絶対に手放してはならないもの

若者たちが放った「瑞々しい違和感」の正体

このZineに寄せられた、宥衣と海花のエッセイを読んだとき、私は経営者として、また一人の大人として、胸の奥を猛烈に揺さぶられるような衝撃を覚えました。

海花は、アメリカから日本へ移住した経験や日常の家電の進化、そしてアナログ時計の読み方がわからない同級生との遭遇を通じて、「便利さは摩擦をなくすが、同時にシステムを不可視にし、人間の意識から大切なプロセスを静かに消し去っていく」と、現代社会の病理を静かに観察していました。

宥衣は、LINEやSNSで一瞬に誰かとつながれる世界の利便性を認めつつも、現場でのタスク処理や効率化のフィルターに追われ、「届ける相手の顔」を想像する丁寧さを失ってしまった自分を、猛烈に悔しがり、身悶えしていました。さらには、ポッドキャストのマイク選びという日常の小さな判断において、安易に「足りないから機材を足す」という効率化に逃げようとした自分を、私の叱責を通じて「ただの労働に陥っていた」と激しく自戒していました。

彼女らが綴った言葉の数々は、若者特有の青臭い理想論などではありませんでした。むしろ、私たち大人が「効率」や「DX」という妄想のもとに、便利さと引き換えに麻痺させてしまっていた「社会の本質」、実して「人間が人間らしくあるための危機」を、かなりの精度で撃ち抜いていました。

社会を見渡してみると、今、私たちはあまりにも「簡単」で「高速」な世界に生きています。飲食店の注文はQRコード一つで完結し、困ることがあればすぐに瞬時に答えを弾き出し、欲しいものはスマホを数回タップすればすぐに目の前に届く。

確かに便利です。無駄も少なく、早い。でも、その超効率化されたフィラーのおかげで、私たちは仕組みの先にいる「生身の人間」を、ちゃんと想像できなくなっているような気がします。飲食店でスタツフに声をかけた時、「QRで」とだけ一蹴された時に感じる、胸がキュッとすぼむような感覚。あれは、私たちが便利さと引き換えに、「体験」を拒絶され、社会の歯車として扱われた瞬間の痛みではないかな？

彼女らのエッセイを読みながら確信しました。現代人は、簡単に求めた結果として怠惰になったわけではない。あまりにもseamless（継ぎ目がない）に構築されたデジタルシステムの中で、人間らしくあるための五感や、相手を想像する丁寧さを、「ただ忘れてしまっているだけ」なのだなと…。

150年前のデジャヴ——「ウィリアム・モリスの孤独な闘い」

私たちが今、目の前で直面している「デジタルsアナログ」「過剰な効率化による人間性の喪失」という議論は、実は今に始まったことではありません。歴史のページを少しめくれば、人類はテクノロジーが激変するたびに、全く同じ壁にぶつかり、全く同じ割り切れなさを

抱えて、激しく葛藤していました。

約150年前、19世紀後半のイギリス。世界は産業革命の真っ只中にありました。蒸気機関の登場と工場の機械化によって、それまで職人が時間をかけて作っていた生活物資が、圧倒的なスピードで大量生産されるようになった時代です。社会は格段に便利になり、豊かさは多くの人々に広がっていきました。

この圧倒的な「効率化」の濁流の中で、一人、猛烈な危機感を募らせて立ち上がった思想家でありデザイナーがいました。ウィリアム・モリスです。モリスは、機械がもたらした利便性を単に否定しませんでした。彼が最も絶望したのは、効率化と分業制が進むことによって、職人たちが「届きたい相手」の顔を思い浮かべながら、誇りを持って手間暇をかけるという「プロセスの喜び」が、現場から完全に奪い去られてしまったことでした。工場に集められた人間は、ただ機械のスピードに合わせ、毎日同じ単純作業を繰り返すだけの「部品」に変えられていったのです。

モリスは看破しました。「手仕事の喜びが失われた労働は、ただの苦役である」と。

そして彼は、「役に立つか、あるいは美しいと思えないものを家に置いてはならない」と訴え、職人のパッションを取り戻そうとする「アーツ・アンド・クラフツ運動」を興しました。これは、テクノロジーの進化を盲信して魂を売るのではなく、人間らしい美意識とプライドを取り戻せという、人類最初の「人間性の防衛戦」だったのです。

この150年前の光景は、現在のAIやDX、テクノロジーを巡る私たちの現場と、不気味なほどに重なり合います。どうしたら早く終わるか、どうしたら時間内に処理できるか、自分の工程を止めずに流せるかを、みんなが真面目に、全力で考えている。けれど、効率化された仕組みの中に閉じ込められた結果、自分の役割の外側で何が起きているかが見えなくなり、全体の目的や本質を見失っている。

150年前にモリスたちが命懸けで戦った「人間が機械の歯車（タスク処理マシーン）になっていくことへの恐怖」は、今、形を変えて、私たちのデジタル社会に全く同じ姿で再浮上しているのです。

パッションだけで走った若き日と、売却という名の逃避

なぜ、私がこれほどまでに彼らの言葉に共感し、実してウィリアム・モリスの思想に心を揺さぶられるのか。それは私自身が、これまでの人生とビジネスの歩みの中で、彼らが直面している「タスク化の罠」に囚われ、手痛い失敗と挫折を経験してきた張本人だからです。

私は20歳の時、初めての起業を経験しました。デジタルもインターネットもないアナログの時代です。当時の私には、まともな事業計画書を作るノウハウもなければ資金のあてもありません。持っていたのは、枯れることのないアイデアと、圧倒的なパッション、そして泥臭く動き続ける体力だけでした。

近道なんてどこにもない時代。あたり構わずアイデアを発信し、少

しでも興味を持ってくれた人がいれば、とにかくその案件にただただ没頭する。予定通りにいかなくても、泥臭く、不器用に向き合う。合理性や効率ではなく、「やるべきことを丁寧に、手間をかける」。そうして一つをやり切ると、そこに向き合った熱量に対して「信頼」という名のご縁や運が生まれ、次の期待や案件、誘いが舞い込んでくる。それが、私の商売の原点でした。

「プロフェッショナルは、その存在を認められてこそプロである」

私はそう信じています。その手間の中にしか、自分の存在が証明されないと思っていました。Printologyの原液は、まさにこの泥臭い経験から湧き出たものです。

しかし、ビジネスが成長し、時間を積み重ねる中で、私はいつの間にかその原点を失っていききました。生き残ること、大きくすること、ビジネスを効率的にスケールさせること。そうした「利己的な利益への欲」が、いつの間にか私の経営のセンターに居座るようになってしまったのです。

何が起きたのか？数字は安定し、商売としては十分に成立していました。しかし、私の目は完全に曇っていました。いつの間にか、お客様やパートナー企業のことを、未来を共創する相棒ではなく、単なる「売買をする対象（取引先）」としてしか見なくなってしまうのです。口では立派なミッションを語っていても、やっていることは目の前の数字をこなすための「タスク」に過ぎない。そこに残っていたのは、起業時に抱いていた夢も、世界を変えるようなイノベーションも、

人の体温もない、ただの冷徹な「労働」でした。ウィリアム・モリスが訴えていた、喜びを失った「苦役」の場所に、私自身が会社を追いつ込んでしまっていたのです。

私は、その夢のない、体温を失ったビジネスの空気に耐えられなくなりました。自分が壊したビジネスの形に嫌気がさし、最終的に私は、会社を「売却する」という形で、その場所から逃げ出しました。

これは、私の経営者人生における最大で、最も苦い教訓です。ビジネスを単なる「効率的なタスク処理」に成り下げてしまった時、どれだけ稼げていても、それは人を豊かにしない。その痛烈な自戒があるから、今のグーフというブランドの意識があり、スタッフ一人ひとりの判断の質に対して、時に牙を剥くほどに厳しくなるのです。

修羅場が教えてくれた「目的」なきものの淘汰

売却という逃避を経て、再びビジネスの打席に立った私に、時代はさらなる試練を与えました。2008年のリーマンショック、そして2011年の東日本大震災という、世界と社会の前提が根底から崩れ去るような未曾有の危機です。特にリーマンショックは壊滅的で、機能的な状態に追い込まれました。世界的な金融システムが一時的に完全に停止し、経済の血流が止まる。誰も明快な回答を持たない暗闇の中、復旧へのタイムラインすら見えない状況でした。顧客企業が不安を拭うために真っ先に行ったことは、「余計なお金を使わないこと」でした。

容赦のないキャンセル、激しいコスト交渉、支払いサイクルの変更などが次々と押し寄せ、文字通り「倒産」の二文字と毎日正面から直面することになりました。

しかし、その絶望的な修羅場と直面したからこそ、ある決定的な本質に気づかされたのです。「目的のない印刷物は、真っ先に止められる。なんとなく使われているものは、コスト競争でしか生き残れない」という冷酷な現実です。

それまで世の中の多くの印刷物は、曖昧な慣習として発注されていました。しかし、危機が訪れた瞬間、「目的のないモノ」は一瞬で無駄として切り捨てられました。生き残ったのは、それを届けなければビジネスが崩壊する、明確な「目的と意志」を持った印刷物だけだったのです。

私はその時、印刷という手段の本当の立ち位置を明快に理解しました。モノづくりは、印刷の本質ではないんだ。印刷とは、必要な情報を、必要な時に、必要な分だけ、適切な場所へ届けることで、受け取る人の体験と行動を変えるための「目的を最適化する手段」でなければならぬんだと。この修羅場の気づきがあったからこそ、私は「適時・適量・適切・適地」という、差別化へのピボット（方向転換）を果敢に決断することができました。

翌々年に起きた東日本大震災の時、私たちはこの思想を実践する機会を迎えました。計画停電が実施され、工場の稼働が極限まで制限される中、私たちはキャッシュフローに巨大なリスクを背負いながらも、

用紙やサプライ品のストックを限界まで増やしました。お客様のビジネスの血流を、どんなことがあっても絶対に止めないためです。毎日が張り詰めた緊張の連続でしたが、私たちのチームは明快に動いてくれました。なぜなら彼らは、単なる「ルール」に従っていたのではなく、私たちが守るべき「お客様のビジネスを止めない」というプロトコル（共通の思想・目的）の重要性を、DNAレベルで理解していたからです。危機が起きた時、older systems(古い方法やアナログな人間の繋がり)は驚くほど素早く再浮上します。システムが機能停止した世界で最後にモノを言うのは、精緻な自動化の仕組みではなく、「何が何でも相手に届ける」というプロの意地と、状況を想像して泥臭く丁寧に動ける人間の力なのです。

「では、印刷にはどんな役目があるんだろう？」

ここで、このissueの中心にある最も重要な問いを、読者の皆さん、そしてスタッフ全員に投げかけたいと思います。

「デジタルがインフラとなったこの時代に、印刷にはどんな役目があるんだろう？」

今まで述べてきた通り、単なる「モノづくり」は印刷の本質ではありません。印刷機を効率よく回して、綺麗な紙の束を大量に作り出すことは、ただの作業でありタスクです。

私たちが考えるプロフェッショナルな印刷とは、クリエイティブ、

使用する洋紙の質感、サイズ、色合い、ページ数、届けるタイミング、そしてタッチポイント。そのすべての要素を徹底的に計算し、調和させ、「届きたい相手の体験という『目的』を満たすための演出」に他なりません。この視点を持った時、G&Nスタッフの「ポッドキャストのマイクの事件」の意味が、すべて一本の線で繋がります。

音声のボリュームが揃わないから、とりあえず安易にピンマイクを買い足す。私は「そんなチャラチャラしたことをするな」「意思を持って」と厳しく叱りました。なぜなら彼女らがやろうとしていた解決策は、私がかつて会社を労働の場所に成り下げてしまったのと同じ、安易な「足し算のタスク処理」だったからです。どうせマイクを選ぶなら、高くて圧倒的に格好よく、オフィスに置かれているだけで、来た人が「これ何？」とワクワクして対話が始まるような、そんなマイクを探して欲しかった。そのマイクがあることで、面白いことを言った瞬間に「今の録らせて！」と言える環境が生まれ、結果としてPintologyへ、もっと沢山の、面白い人を巻き込める未来までをデザインして欲しかったのです。

これは、単なる機材の無駄遣いを戒める話ではありません。課題に直面した時、それを安易な機能の追加（タスク）で片付けるのか？それとも、ブランドの思想をより高いステージへと引き上げるための「機会」と捉えて、全体最適の体験をデザインするのか。その微差にこそ、ビジネスの「質」が宿り、プロとしてのプライドが試されるのです。

スタッフがやらかした梱包ミスも全く同じです。時間を守るという

タスクに追われ、その箱を開けるお客様の「目的（体験）」を想像する時間を省いてしまったからこそ、このミスは起きたのです。効率や合理だけを追い求め過ぎると、人は考える事を止め、感覚が麻痺し、大切な本質を「忘れて」しまいます。だからこそ、私たちは敢えて手間をかけ、丁寧に、プライドを持ってやり切らなければならない。その手間の余白にしか、お客様からの信頼は生まれず、社会への愛情は湧かず、次への期待は生まれないのです。

では、私たちが目指す「豊かさ」とは何でしょうか。

私は、「豊かさとは、人が人であることを、自然に自覚できること」だと信じています。

デジタルという画面の中の世界は、情報を最速・均一に伝えるのに極めて優れています。しかし、画面はどれだけタップしても平滑であり、人間の五感をどうしても平坦にしています。便利すぎる世界は、人に「盲目」を強いるのです。

だからこそ、私は「印刷」という物理的な手段をあえて選択しました。選ばれた紙のざらついた手触り、独特のインクの匂い、めくる時のサイズ感。これらの物理的な体験は、デジタルの便利さの中で麻痺し、私たちが失いかけていた「人間としての豊かな五感」を、自然に、鮮やかに呼び覚ます力を持っています。デジタルという冷徹で高速な骨組みに対して、人間らしい体温や感情という肉付けをしていく。これが、印刷という手段が社会に提供できる、「色付け」なのだとは私は信じています。

私たちは、もう絶対に逃げない

私は今、経営者として、また一人の大人として、猛烈な喜びと幸福感を感じています。二十歳の頃、もしタイムマシーンがあるならば、孤独に突っ走っていたあの頃の自分に伝えてあげたい。

「大丈夫。数十年後、デジタルの莫大な恩恵も、デトックスしたくなるような疲れの両方をリアルに知っている、瑞々しい世代（Gen Z）が最高の相棒になる。彼らが『本当に大事なものでなんだった』と、君の背中を本気で揺さぶってくれる、最高にエキサイティングな時代が来るよ」と…。

彼らが日常の業務の中で、システムに流されそうになる自分を「悔しい」と自戒し、より良い体験を創りたいと身悶えしている姿を見られることが、私は嬉しくてたまらないのです。

今回、Gofzineに関わるスタッフはこのissueを通じて、互いの恥部も、過去の失敗も、プロとしてのプライドも隠さずに、全力で「文字のキャッチボール」を交わしました。これは、現代のタイパやコスパを重視するビジネスにおいて、最も効率が悪く、最も手間のかかる作業です。

でも、この「文字のキャッチボール」という泥臭い摩擦の中にしか、世代を超えたリスペクトも、未来への愛も宿りません。効率化のフィルターのせいで、目の前の人間や、その先にいる顧客を想像できなくなっている全ての大人たちに向けて、私は経営者の端くれとして

強く提言します。

「システムやチャットの通知を一時的に止め、目の前の若者と、顧客と、徹底的に言葉を交わす手間を惜しまない勇気を持とうよ」と…。

「やDX、イノベーションは決して私たちの敵ではありません。問題は、私たちが便利さの裏側で、「人が人である自覚」を保ち続けられるかどうか、ただそれだけです。」

私たちが目指すエコシステムとは、単に会社やシステムを効率的に繋ぐネットワークの話ではありません。「こういう価値や体温、体験を、世界の果てまで届けたい」と同じ志とパッションを持ったプロフェッショナル達が、本気で握手を交わし、それぞれの責任の領域を命懸けでやり切る、愛と信頼の循環システムのことです。

人が人である自覚をすること。それは、目の前の小さなマイクの置き方ひとつ、届ける梱包の丁寧さひとつ、そして共に働く相棒の存在から決して目を逸らさず、「愛すること、大切にすること、そして何より、そこから絶対に逃げないこと」です。

かつて、ただの労働に嫌気がさしてビジネスから一度逃げ出した私達が、今、この頼もしいGen Zスタッフ達と手を取り合い、Printologyという思想の局面に再び立っています。彼らが「時代を受け取る側

ではなく、創る側にいる」と宣言してくれたことが、私の何よりの誇りです。

若者たちの瑞々しい違和感と、大人が培ってきた歴史の教訓が交差するこの場所から、New Normalへの道は開けるんだと思います。

便利さを
否定したいわけじゃない。
ただ、
戻れる場所を
残しておきたい。

編集・コンセプト

白井有衣

黒田海花

コピーライティング／編集

白井有衣 日本語

黒田海花 英語

アートディレクション／デザイン

黒田海花

グーフによる出版物